



TITLE:

<學界展望> ロシアの東洋學

AUTHOR(S):

石濱, 純太郎

CITATION:

石濱, 純太郎. <學界展望> ロシアの東洋學. 東洋史研究 1936, 1(6): 581-597

ISSUE DATE:

1936-08-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/138710>

RIGHT:

學界展望

ロシアの東洋學

先日塚本内藤兩先生から今年の當研究所の講演は君に定まつたから何かやれ、先づロシアの東洋學がよからうと御下命がありました。ロシアの東洋學と云ふ様な大きな話はよく知りませんし、殊に六月は忙しい時ですからと御斷り申上げました。御斷り申上げても中々聞入れて下さいませず、何のかんのと云ふより兎に角ロシアの東洋學がよからうと強硬談判をせられるので、終に四五日の考慮をしたい、そして荊妻にも相談したいと申出て一先づ引退りましたが、いくら考慮してみてもよく知らん事を忙しい時には到底難かしくて出来ないと思ひましたが、一應家内に一寸話して見ましたら、家内などは氣樂なもので、知る知らんは兎に角、グズグズ云はないで御

石濱純太郎

下命があつたら難有く御受けするものと、ヒドク簡單に片付けて了ふもんですから、そうかなアと到頭あまり調べる事もしない内に、こんな所へ立つて暑い時分に皆様に聞いて頂く事となりました。まづ試験を受けると云ふ恰好であります。

演題は「ロシアの東洋學」とエラさうな題になつてゐます、塚本先生はトテモ難かしさうな長い題をつけたのでありましたが、私は「ロシアの東洋學の話」位の所で御勘辨を願つたのですが、肝要な話の字を截り取られて矢張りエラサウな題になつて居ります。これでは記憶に任せた漫談には一寸ふさわしくありません。實際私がこゝでロシアの東洋學を紹介するのは誠に變なもの

であります。私は多少ロシアの東洋學の論著を參考には致しますものゝ、ロシアの東洋學そのものを精しく調査した事はありませんので、よく知りません。自分の研究に關係ある東洋學者にしても、姓は知つてゐるが詳名も父稱も知らず、經歷なども知らんのが澤山あります。論者にしても有名なので見たい見たいと思つてゐ乍ら一見すらしなもののが亦澤山あります。それ所か偶々所有してゐるものでも到底お話する程詳しくは讀んでゐないものが多々あります。又ロシア東洋學の掌故に至つては殆んど知りません。只多少早くからロシア東洋學に縁の多い研究に従事してゐたものだから、自然よく知つてゐるのだらうと、塚本先生達に誤解されたものと見えます。誠に變な話であります。それでも私がロシアへでも行つた人間ならば、歸朝者談とか、私の見たロシアの東洋學とかとして多少の意味も出來、面白い餘談もありませうが、ロシアとは紙上で知る計りで浦鹽のウも見てゐなければ今は滿洲國の大連も知りません。歌人は居乍らにして天下の名勝を知ると云ふが、私の様なへボ歌人はロシアへさも行つた様な顔してヌタを讀むさへ氣愧づかしい。誠に變な話であります。又おまけに本研究所ときては、所

長狩野先生初め、矢野、羽田、梅原諸先生などは皆ロシアに滞在して諸種の調査をされ、且つ親しく先方の諸先生と肘を把つて學術を商榷された方々計りなので、御論著を拜見しましても盛んに新刊を御涉獵なつてゐる事が分るのであります。さう云ふ研究所で厚顔しくもロシアの東洋學と題してお話するハメになつたのですから變と云はざるを得ません。お話をすると云ふより全く試験されるんで、恐ろしい極みであります。前口上が長くありますが、この講演計りは長い前口上で御斷り申す必要がかくあつたのです。

全體ロシアの東洋學と云ふものは、どうも文字が變つた形をしてゐるせいとか、どこの國の學界でも熱心に注目してゐない様に思はれます。私が大學を出て多少注意しかけた時でも、まだ歐洲の東洋學界はさう注意してゐなかつた様でありました。某々の問題では當然參照檢討されなければならぬ様に想像されるものでも、露語のものゝ顧みられないと云ふ風でした。近來でもまだその傾きがある様に思はれます。これはその言語文字の爲めでありませう。従つて歐米諸國でも露語文獻の蒐集はさう豊富で無い様です。最も多く露語文獻を利用される人

はラウフェル (B. Laufer)・ペリッオ (P. Pelliot) 兩先生で、外の先生は大抵は露語でないロシア文獻を利用されるに過ぎません。ラウフェル先生は露語文獻の入手し難きを憤慨して、露國文獻に注意し得ない責はロシアに在るんで、入手し得るなら讀んで検討すると抗議した事があります。そうすると、或は露語文獻の流傳方法の不備も、言語文字の阻隔以上にロシアの東洋學界を世間に不明にせしめたのかも知れません。今では露語文獻の流傳は以前よりズツト便利らしいが、それでも中々不便であります。

ロシア文獻の入手し難い事は私にとつては今猶ほ古の如しであります。ロシア革命以前には中々思ふものが手に入らないので随分骨も折りましたが、ラウフェル先生の憤慨を讀んだ時には、あの有名な先生でもそんな風なら私なんかは無理も無い次第と、却て一種の安心した氣持になつた事がありました。革命前でも後でも、どんな本でも取寄せられますと元氣のいゝ本屋さんの言を信じて、少し注文をして見ましても、注文を聞く丈の事で、來てみたり、來てみなかつたり、二月で來るやら三月で來るやら、半年かゝるやら一二年もかゝるやら、それで

も到着すれば難有いので、到底アテには出來ませんでした。神戸のマトゼフ爺さんが、時々古本を見せてくれましたが、アカデミイの出版物が少いので學術的のものはそう得られません。此頃の新聞物などはネフスキさんが時々送つてくれるのを喜んで待つてゐるのみです。

我國の露語文獻の蒐集はかなり有るのでせう。京大の東洋史研究室には随分珍しいもの迄ある様でした。本研究所には無いと云はれましたが、それでも私などの見なかつたものがありました。分量は餘り多くはありません様です。又東大の事はよく知りませんが、東洋文庫は實に盛んなものであります。以前にはよく石田杜村先生に鼻の尖に珍本を振廻され、どうですと見せびらかされて泣きたくなる様な目に何度か會ひました。アノ東洋學論文滿載のロシア考古學會東洋部の有名なイズボスチャなどは、私なんかは入用の所を極めて小部數しか所藏してゐませんが、そのイズボスチャをエ、初號から全部揃つてゐますよと、石田先生にサモ事も無げに言ひ退けられては、實際開いた口が塞がりませんでした。いづれ其内に本所あたりでもそんな目に會うんでせう。心臓を強くしとかなないと生命が持てますまい。池田文庫の事は守屋

君に伺ひましたが、故池田君は大阪外國語學校で知つてゐるんですが、守屋君が見せて呉れた二三の本などは池田君が早く私に呉れといたら嬉しかつたらうになど、妙に不貞腐れな感情を抱かしました。どうも大變イヂ汚ない。

緒て、ロシアの東洋學はと問はれたとすれば、早速に百科辭典でも見て御覽と私は返事したい。私は幸ひ一二の百科辭典を見得るのです。一は Brokgauz i Efron : Enciklopedičeskij Slovar'. 二は同じ出版者の Novyj Enciklopedičeskij Slovar'. 三は Sibirskaja Sovetskaja Enciklopedija. 一の古い百科辭典には未だ東洋學 (Vostokovedenie) と云ふ項は出來てゐませんが東洋學關係の種々の項目は澤山有つて著名の學者が筆を執つて居ります。二の新辭典には東洋學の項が出來て、A. I. Bardinkevič が執筆し、三のシベリア辭典には Prof. D. Pozdnev が書いて居ります。これ等を中心にして關係諸項をそれぞれ鈔出添補したら、かなりなロシア東洋學が出來上りますから、それを涼しい顔して申上げていいのです。私は生憎と閑暇と度胸とがありません。度胸と云ふのは白狀すると、新辭典もシベリア辭典も實は終りの方が見ら

れません。又兩方完成したのかしないのかも知らないのであります。それに近頃はサエエト百科辭典が大小二種と日本語の小とが出てゐる様ですが、それ等は皆見られないのです。ですから私の様な度胸の無いものは冷汗をかくより知らん顔の方が氣樂であります。百科辭典以外に専門の單行本があります。V. Bartol'd : Istoriia izučenia Vostoka v Evrope i Rossii. と云ふ大學の講義のプリントを一九一一年に出版したものです。これは實に好い本で私を喜ばしたものであります。國別に其國に關する研究史を概説してあるので、前編は歐人の研究、後編は露人の研究を紹介し、各章末に參考書を歴記してあります。石田杜村先生の名著「歐人の支那研究」の凡例に此書に負ふ所ある旨を記してありました。石田先生の依られたのは此書の獨乙譯本である様です。其後一九二五年に此書の増訂第二版本が出てゐますが、新しい文籍をよく補つてある様です。バルトオールド博士は博覽多識で最もかゝる學史綱要の講述には適當なる方であります。かゝる廣範圍の撰述には得てして讀んでゐない參考書を挙げ易いのでありますが、先生は眞に博渉で然もどの方面に於ても別裁するの力を持つて居られた人ですから、

安んじて依られます。先生は古く *Mitteilungen des Seminars für orientalische Sprachen zu Berlin* にロシア東洋學を紹介してゐた様ですが、詳しい記憶は今有りません。先生に惜むべきは漢文に迄及ばれなかつた事です。専門の關係上致し方もありますまい。私はまた浦鹽東洋學院の講義プリント *N. V. Kliner : Istoričeskij očerk razvitiia osnov Kitajskoj materialnoj i duchovnoj kultury, v svyazi s vyjasneniem rol poslednej v žizni drugih narodov na Dal'nem Vostoke. Čast I. Vvedenie. Obzor istočnikov. 1908-9 akadem. god.* を持つてゐますが、これは支那日本等極東に限られてゐる上に、露國以外の文獻に重を注してゐる様ですから、この場合特に必要と云ふでもありますまい。新しいロシアの東洋學書の紹介は、ペリオ先生が通報に、ボツペ先生が *Asia Major* に屢々書いて居ります。兩先生の事ですから十分參考するに足ります。我國では石田杜村先生が黒潮、支那、東亞などの雑誌に紹介されたと覺えますが、博覽多識の石田先生の事です。から悪からう事はありません。又文籍を主としたものではないが、コンラッド博士 (*Dr. N. Konrad*) が大阪の靜安學社で話されたものがありますが、短いけ

れども非常に要領のよいものであります。然しそれも既に十年前の事となりました。コト并チ教授の編纂したペンフレットをカサニンの英譯したものとあります。Oriental Studies in Petrograd between 1918 and 1922, translated by M. Kasanin. Bulletin of the School of Oriental Studies, London Institution. Vol. III. Part IV. 中々便利に出來てゐるものでペトログラド時代を知るよすがとなります。又 *Očerki Stran Dal'nego Vostoka. Harbin, 1931* と云ふ編纂物があつて、東洋學序論 (*Vvedenie v Vostokovedenie*) と副題してありますが、我々の云ふ東洋學とは多少趣きを異にしてゐます。中の序論 (*Vvedenie. Poniatie o Vostokovedenii*) はデ・ボズドネエフ教授の筆で、研究機關の事が主であります。こんな風の紹介は二三我國の雑誌に出た事を覺えてゐますが、さまで役に立つ程のものは無かつた様です。又いろいろな専門々々でそれぞれの研究史の書かれてゐるものは、固り別に澤山あつて非常に結構なものが多いが、彼此參照して大體を述べる事は私の手に餘ります。以上は私自身の知つて居ますロシアの東洋學一般の參考書であります。序でに文籍目錄を紹介したい。有名なるメジヨフのビ

ブリオグラフィ(V. Méjow : *Bibliographia Asiatica*.) があります、第三巻が一八九四年の出版だから、今では新しいものが入用です。私は *Čo čiat?* と題する小さい一冊のものを得ました所、新文籍が澤山出てゐるので大に喜んだのですが、今何處かへまぎれ込んでしまつて捜し出せませんから、詳しい事は遺憾乍ら申上げられません。又各地方別、各専門別の文籍志とか目録とかは、あちこちの雑誌又は單行小本で出版されたものが少なからずある。私はマトゼエフ、カザリノフ、アザドフスキ、ホロシフ、スロボドスキ、などの諸著を今はない雑誌「民族」へ紹介した事があるが、これ等は大抵メジヨフのブリオグラフィをそれぞれの項目に於て續くものでありますから必要なものであります。其他思ひ出す二三を挙げますと、東京の第三回汎太平洋會議に提出の *The Pacific, Russian Scientific Investigations*. Leningrad, 1926. (これは露文本と英文本とあります) 及び *Bulletin of the Pacific Comitee of the Academy of Sciences of the USSR*. の太平洋研究に於ける、N. N. Poppe i G. A. Starcev : *Fino-Ugorskie Narody, očerk*. Leningrad, 1927. N. N. Poppe : *Etnografskoe izučenie finno-ug-*

orskich narodov v SSSR. (何かの別刷本) のフィンウナル族に於ける、E. A. Voznesenskaja i A. B. Piotrovskij : *Materialy dlya bibliografii po antropologii i etnografii Kazakstana i Sredneaziatskich Respublik*. Trudy Komissii po izučeniiu plemenogo sostava naseleija SSSR i sosedel'nykh stran, 14. Leningrad, 1927. の中西に於ける、A. I. Vosrikov : *S. F. Oldenburg i izučenie Tibeza*. Zapiski Instituta Vostokovedenija Akademii Nauk, IV. (これは文籍目録はなうが) の西藏に於ける、Vl. I. Ogorodnikov : *Očerk Istории Sibiri do načala XIX stol. Čast I*. の序論のシベリアに於ける、これ等は皆ロシア文獻を知る津梁であります。現今ではアカデミヤから専門の東洋文獻志 *Bibliography of the Orient* が一九三二年から出てゐますが、これは文獻研究雑誌で文籍目録ではありませんが、いづれは別行の目録も出て来る事でせう。勿論ある項目のものは見られます。この雑誌は貴所に揃つて居る様ですから御承知でせう。然し何にしても、いくらロシアのブリオグラフィが分つても、原本にお目に掛り難い我々では役に立たないから、分れば分る程却て馬鹿々々しくもなる事があります。

研究機關の事情に就いては私はよく知りません。私の基礎智識が足りない計りでなく、革命以後組織の變更、分科、創設があつて、よく名稱が變るので、特に順序立てて調べて置かないと分り難いのです。勿論こんな事こそ百科辭典か何かで見えて置くといふのでせうが、私には興味が少いので自然注意しないのでよく分りません。何と云つてもロシア學術の中心となつてゐるものは、レニングラドのアカデミヤ・ナウク科學院であります。私は此アカデミイの一覽みたいなものを二冊持つて居ります。L'Académie des Sciences de l'Union des Républiques Soviétiques Socialistes, 1917-1927. Leningrad, 1928. Aziatskij Muzej Rossijskoj Akademii Nauk, 1818-1918. Peterburg, 1920. 兩方共に何かの紀念出版で有りますが、兩方を参照するとアカデミイのみならず、ロシアの東洋學を彷彿し得ます。資料の蒐集と云ひ、研究の方面と云ひ、學者の業績と云ひ、どうしても立派なもので、東洋學の研究では世界に於ける一大學苑であります。アカデミイは何でも大學教授を何年か勤め上げた立派な成績ある人々がアカデミクに推薦されるらしく、アカデミクになると大學の授業は自分の自由になるとか聞いてゐま

す。アカデミクは學界最高の名譽でありますが、アカデミクになつても立派な論文をジャンジャン發表するには眞に敬意を表します。外國學者もアカデミイから推薦して名譽會員、通信會員などします。このアカデミイを周つて圖書館博物館美術館などがあつて活動を助けてゐる。そしてアカデミイは種々な研究院に分れ、種々な委員會によつて研究に従事され、それぞれ見事な研究報告を出してゐます。その中で近頃は東洋學院 Institut Vos tokovedenija が組織されて、我々の所謂東洋學の大部分はこゝで研究されてゐます。故オルデンブルグが院長でありました。私の知るアレクセエフ、コンラト、ネフスキ、シュツキなどの諸先生は皆こゝに附屬してゐます。アカデミイは露舊都の東洋學の中心であるのみならず、實にロシア東洋學の中心でありますから、諸地方の學術研究機關ともよく連絡して仕事をしてゐる様に見受けられます。又各學者は各々専門の地方へ始終研究調査に派遣せられてゐます。その大規模のものは何々探検何々ミツションとか呼ばれ、數年間に渉るものもあります。レニングラドが主として古代研究であるに對して、モスコウの大學は現代東洋の研究を大宗として居り、これも

よく活動してゐるらしいですが、私にはよく分つて居りません。尙ほ各地方に大學があり、それぞれ東洋學關係に於て相當の位地を占めて居ります。カザン、イルクツク、浦鹽の大學などは傳統的に有名でありますが、タシケントなども中々成績の見るべきものがある様です。學會は各大學を中心として澤山ある様です。古くから有名な地理學會などは至る所に支會が設けられて盛んであります。其他何々研究會と云ふ様なもので東洋學關係のものが殊にシベリア地方で見られる様であります。その詳しい事は知りません。東洋學で有名な考古學會東洋部はどうやらアカデミイの東洋學委員會 *Le Comité des Orientalistes* が繼ぎ、*Institut Vostokovedenija* が後を承けてゐるらしい。

出版物は中々盛んなものであります。私なんか個人の力では到底萬分の一の眼福も得られるものでありません。歐洲大戰以前のものには今更ら觸れるのではありませんが、次の二雜誌は東洋學關係の論文が多いに關らず餘り注意せられてゐない事を指摘して置きたいと思ひます。*Zurnal Ministerstva Narodnogo Prosvещения*, *Živaja Starina*。私は後者の僅か一冊を見た事はありますが、前

者は一冊も見た事も有りません。この兩雜誌は西歐の學者達も殆んど引用しませんのを見てゐる餘り流布してゐない事は想像するに足りませんが、私は將來本研究所あたりで参考し得るに至らん事を希望して止まないものであります。出版物中特に我々の注目しますものはアカデミイのものですが、アカデミイでは *Izvestija* (Bulletin) が主であつて、その中に出た東洋學關係のものは蒐輯して、*Mélanges Asiatiques* として別行しましたが、^④ 後には考古學會東洋部のザピスキと合併して、*Zapiski Kollegii Vostokovedov* となり、第五卷位迄出ました。其後が今の *Zapiski Instituta Vostokovedenija* でありませう。又別行の専門雜誌で *Iran* と云ふのが三卷迄出ました。小論文計りを載せた *Comptes Rendus de l'Académie* も姑く出てゐましたが、其後が *Vestnik Akademii* でありませうか。又元の *Petrogradskij Institut Živych Vostočnych Jazykov*, 又 *Leningradskij Vostočnyj Institut imeni A. S. Enkidze*, 今の *Institut Vostokovedenija* は引續して單行本で *Izdanija, Trudy* を出して居りますが、各國の文典、文集、歴史、其他の論文がもう四五十冊も出ました。其他何々コムシヤなども別に報告を出してゐま

す。二三の總名を擧げて見ます。

La Commission pour l'étude des Républiques Mongole,
de Tannou-Touva et de la République Autonome Bou-
riate-Mongole :

Mongolie du Nord. 3 volumes.

Matériaux de la Commission. 20?

Naučno-issledovatel'skij Komitet Mongol'skoj Narodnoj
Respubliki :

Mongol Komissii Zokioolud. 15?

Komissija po izučeniiu plemenogo sostava naselenija
SSSR i sopedel'nyh stran:

Trudy Komissii. 20?

Izvestija Komissii. 3?

La Commission pour l'étude de la République Autonome
Soviétique Socialiste Jakoute :

Matériaux de la Commission. 40?

其他有名な佛教文庫 Bibliotheca Buddhica も續刊され
てゐるが、^⑤蒙古國民文學選集 Obrazy Narodnoj Slov-
esnosti Mongol'skich Plemen も續刊されてゐた。印度哲
學叢書 Monuments de la Philosophie Indienne はシチ

エルバトスコイが法稱の他相續成就を調伏天の疏と共に
翻譯したのを出したが、後はどうなりましたか。又
一時アバズミイの人を中心と Vostok, Kraevedenie;

Etnografija など種々の雜誌が出ましたが、Vostok なる
は五冊で終刊したし、後のものももうなつたでせう。モ
スコウはよく知りませんが、Institut Etničeskich i Naci-
onal'nyh Kul'tur Narodov Vostoka : Učenyje Zapiski II
を見ました。Trudy Obščestva Izučenija Urala, Sibiri
i Daïnego Vostoka ① 1 冊、Nouvel Orient, revue de
l'Association Russe pour les études orientales ① 1 冊^⑥ だ
んかを瀏覽して、中々我々に必要なものがあるを知りま
した。其他の地方の大學も古くから報告が出てゐるんす
から引續いて出てるませう。Vostočno-Sibirskij Otdel
Russkogo Geografičeskogo Obščestva ① Sibirskaja Živaja
Starina. Irkutsk; 及び K izučeniiu Sibiri; Vestnik
Naučnogo Obščestva Tararovenienija. Kazan なるは皆大
學中心でせう。尙ほ革命以後は東洋諸民族に關するパン
フレット式の小著が實に澤山出た様で三四冊は見るを得
ましたが、小著雜書と云つても中々參考に資し得るのは
何と云つても自國領内の事ですから、自づと外の國々で

は眞似得られない點があるからです。純學術團體の雜誌でないが、諸民族の語で出る雜誌報告類が多くなつてゐるのには注意すべきで、殊にロオマ字化運動以後に多い様です。此等はどうも我々には見る事が難しい。それ等の雜誌報告書などにはアカデミヤの人達の學術的議論も出てゐるんですから雲烟過眼視は出来ません。是非蒐集せなければならぬので、雜誌報告そのものが我々の研究の資料であると信じます。例へば千九百三十年五月のアルマアタに於ける正字會議で新疆トルコ語をウイグル語と總稱するに決定した事などは或は御存知ないかも知れませんが、それ等の議論などもこのウイグル語で出てゐるのです。古くタシケントか何處かで出てゐた雜誌に Finet の書いたウイグル語蒙古語を論じた文があるんだが、そんなものは我國の尙處に在るでせうか。私はこの詩人學者の文を見たいものです。それで私は新古の地方語文獻蒐集の必要を認めて頂きたいと思ふ。

探検隊の派遣は随分盛んに行はれてゐます。異民族統治上にも必要がありますから、ロシアの東洋探検は数多いのが當然であります。地理學的、動植物學的、礦物地質學的、天文氣象學的など何しろ澤山あるが、我々に必

要なのは民族學的、言語學的、考古學的東西であります。然し遠隔地方の調査ですから、只單一なる目的のものとは少く、地理を主としても動植物の採集が附随したりするのも當然です。地理では Priewalskij など數回に涉り、我國でも紹介されて有名ですが、この遠征はコズロフ探検隊に承け續がれます。Uchomskij 公の東方旅行などは風俗宗教などの調査が主で、佛教資料は Grünwaldt 博士の利用で有名な大著の完成となりましたし、プリアト民族資料は漸く最近 Materialy dlia Istorii Burjat-Mongolov として陸續出されるに至りました。コズロフ隊は元來は地理が主でしたが、生物蒐集もあり、我々には考古學的蒐集で親しいのであります。コズロフ隊が偶然古經類を拾つたのが機會となつて、あの喧ましい中亞考古探検の勃興となつて來ました。

コズロフはブルジェヴルスキ隊の一員としてその第四回目から參加しましたが、第五回の途中でブルジェヴルスキが死んだので、それは Pevcov 隊となり、又其次の Roborovskij 隊にも加はりましたが、其時に吐魯番から異體文字の斷簡を持歸りました。イヴノフスキ、オルデンブルグ等が調査したらウイグル文字だったので、之を

ラドロフが研究する事となりました。そこでこんなものが出土するなら一度探検したらとなつて、委員會が出来てドクトル・クレメンツの吐魯番出動となつたものがあります。

新疆考古學の本家は英獨佛と思はれ勝であります、現地ですぐ蒐集研究に手をつけてゐたロシアは元祖争の渦中に投じていゝのであります。一八八二年に軍人上りの Petrovskij はカシユガル領事となりましたが、この領事はロシアの對新疆政策の根據地の司令官であるからカシユガル王と呼ばれる程の威權がありました。ペトロフスキは外交々渉も旨く、遂に部下の人々をウルムチへ侵入させました。古鈔本を入手し得た Krotkov, Solodov などがそれであります。ペトロフスキ自身も新疆調査に従事してゐる間に古物の蒐集研究に入り、有名なベトロフスキ蒐集を遺す事となりました。

かくてクレメンツの探検、ペトロフスキ一派の蒐集がスタインの新將來品と共に各國を刺戟し、ラドロフの主唱の下に國際中亞探検協會を成立せしめて、英獨佛日露などの盛んなる訪古旅行の氣運を惹起せしめたのです。そしてこの國際協會の本部はロシアに在る事となりました。

た。この協會の報告雜誌もあるのですが、私未だ眼福を得て居りません。

このクレメンツ、コズロフ、オルデンブルグなどの諸探検は別に申上げるつもりも有りませんが、コズロフ蒐集の大宗は西夏語文書で、オルデンブルグ蒐集の中には燉煌古鈔本がかなりある様です。共に梅原先生にでも聞いて頂きたい。序で乍ら最近の西夏研究状況を申し上げます。呂惠卿の孝經注が出ました。吉川先生に伺ひますと、宋史の藝文志には名が出てゐますが、どうも佚書らしく思はれます。佛典では論部が漸次増加して來ました。西藏語からの翻譯らしい。西夏佛典は漢本からのみでない事は分つてゐますが、西藏本からもかなり譯されてゐるらしいのは注意すべき事であります。現行西藏々經刊本より古い時の譯本ですから、西藏大藏を校讀する有力な資料ではありませんか。西夏研究も又異つた地域が開けてくる次第であります。ネフスキ先生は今夏私に助手に來いと云ひますが、私も亦行つて見たいが、先立つ金がありません。

諸方への派遣調査中で蒙古諸地方はかなり注目させられます。それはブリアトやハルハの研究援助の意味もあり

るのでせう。その爲め言語殊にブリアトの方言は非常にハッキリして來ました。又兩國のロオマ字化の爲めの諸研究が大變に數多くなつてゐます。それは勿論蒙古のみではありませんのです。

一體ロシアの東洋學は古くから言語風俗宗教等を調査するのが主ですが、何しろ東へ東へとシベリアへ進出するのでから異民族の複雑な爲め其根底を言語風俗等に置かざるを得ないのでせう。支那と接觸して北京に聖教會が出来てからは、こゝに支那學輸入の根據地を作りました。以後教會の學僧は固より、諸學者もこゝに依つて支那蒙古西藏などの諸學問を致しました。この教會に關しては N. I. Veselovskij : *Materialy dlja Istorii Rossijskoj Duchovnoj Missii v Pekine*. Vypusk I. S-Peterburg 1905. N. V. Küner : *Novějšaja Istorija Stran Dal'nego Vostoka. Čast' II*. Vypusk 3. Prilozenie. Vladivosloč, 1910. 等があります。研究報告は Trudy Členov Rossijskoj Missii v Pekine と稱し、第一卷第二卷は獨譯があります。この報告第四卷中に西遊録や元朝秘史の譯が出てゐるので有名であります。この報告の再版本が北京で出てゐますが、石田先生にあの安本の事かと私は吐られ

た事があります。後に浦鹽の東洋學院(後の大學)が出来てからは浦鹽が東洋學の東洋中心地の如くなりました。所で支那と接觸する迄の民族は殆んど歴史は無いが、支那は史書が多いので東洋の歴史研究に這入りましたが、それでもまだ翻譯輸入が主であります。随つて全體に東洋學は言語風俗宗教の研究が主で、最近には各民族の史志を一通り書く事となりました。政治史計りでなく、文學史、社會史なども作られました。勿論一方には文獻字書をも一通り作らうとしてゐます。

偕て、ロシアの東洋學は我々の云ふ東洋學より廣いので、東は日本から西は北アフリカ地方迄、そしてフィンウゴル族も這入り、北は極北民族から南は印度馬來も含むものでありますから大變なものであります。以下はコンラトさん話の順に従ひ概觀しませう。

一、古代。エヂプト、アッシリア、バビロニア、ユダヤ、フエニキヤ等。

これ等に就いては私は智識がありませんが、シレイコと云ふ詩人で天才的學者は一日にして楔形文字に通じて翻譯をしたと云ふ話を聞いて驚いた事を覚えてゐます。

二、近東。トルコ、アラビア、ペルシア。

アラビアのクラチユコフスキ、ペルシアのロマスケギチ、トルコのサモイロギチなどは固り有名ですが、若手でアラビアのエベルマン、ペルシアのベルテルス、トルコのゴルドレフスキ、ドミトリエフなどの俊才が居ります。ベルテルスは波斯文法、波斯文學史などを著しましたが、簡單明瞭な好著であります。カウカズもこゝへ這入るんでせうが、こゝはヤフエト語學の大祖師アカデミク・マル(N. Marr)の獨壇場でありますので、カウカサス地方の歴史言語などに澤山の論著があります。マルの外にはタカイシユギリ、キプシデエ、チコニヤ、チャラヤ、オニアンなど大抵はカウカズ人です。Materialy po Jafetšeskomu Jazykoznaniju と稱する叢刊がありますが、その中にどう云ふものかボツベのツングウス語研究(N. Poppe: Materialy dlja issledovanija tungusskogo jazyka. 1927.)が編入されてゐます。ソグド語にはロオゼンベルグが居ります。

三、中東。中亞、トルキスタン。

露領支那領トルキスタンの研究はバルトオルドが第一人者でありましたが、今はマロフ(S. Malov)、ポリヴ

ノフ(E. Polivanov)がゐます。マロフのウイグル語は古代語も現代語も正にラドロフの名實共に後繼者であります。ポリヴノフは日本語支那學にも名著がありますが、ウズベク語研究にも權威的論文をいくつも書きました。

四、極東。支那、朝鮮、日本等。

支那はアレクセエフ(阿利克 B. M. Alekseev)が文字と文學を、シュツキ(楚紫氣 J. Šucki)は文學哲學を、ラグノフは音韻を、ブナコフ(布那柯夫 G. Bunakov)が龜甲文を研究してゐます。日本はコンラトさんは明治文學につき發表しました、ネフスキも日本が主ですが、臺灣曹族語の研究も發表しますし、西夏語の研究も世に問うて居ります。ドラグノフも西夏文を調べてゐるらしいが、ネフスキは西夏語の權威と云つて宜しい。蒙古ではヴラデミルツォフは早く死なれたが、遺著の蒙古社會制度論 Obščestvennyj Stroj Mongolov. は未亡人の手によつて校刊された。後繼者のボツベ教授は蒙古語蒙古文學に關する論文から、ツングウス、チュワシユ、ヤクウトなどの語に關する論文等續々精細なる研究を出し、ウラル・アルタイ語の研究はこれ

が爲めに急速に進歩を見せて居ります。これに協力するカサケギチ、サンジェエフ、バムバエフ等が居りますから、蒙古學の覇權は當分はロシアから動きはしないでせう。パレオアジアト族の研究もガバノギチ等の人々がある様ですから相當なものらしい。シャマン教の研究もアノヒン、マロフなんかによつて引續き行はれてゐます。

五、印度、馬來。

印度學はオルデンブルグ元老を失つたが、大乘佛敎通のシチエルバトスコイ以下 Obermiller, Vostrikov 等梵藏兩語に通じた人々がゐて、世界の學界にも重きをなしてゐる。然し梵藏語佛敎に止まらないで、ツビヤンスキ、メルワルトなどあつて印度諸方言文學迄研究されてゐるのは驚くべきであります。馬來語の事は知りませんが、ネフスキの曹語は南洋語への進出であります。

次にロシアで注意すべきは羅馬字運動であります。これは從來文字を有しない民族の語はロオマ字で表はし、從來文字を有してゐても其文字が其言語を表はすに不當なものであるから之をロオマ字化しようとするのである

ります。最初はロシア字は誤解を避くる爲め一切採用しない筈でありましたが、そうも行かないと見えて一二入れる様であります。露領内の異民族の多くはアラビア文字を採れるトルコ族ですから、このトルコ族のロオマ字運動が起り、バクウで會議を開いて決議をして實行に移りましたが、ケマルパシヤのトルコ共和國が之を強制實行に移つてからは運動が又盛んで、ロオマ字化もトルコ族のみならず、凡ての語の上に及び、領内支那人の爲めの支那語などにも試み、果てはロシア字のロオマ字化迄進展して行きました。従つて新ロオマ字文化運動も起りいろいろ委員會がアチラコチラに設けられてゐる様です。そうしていろいろ新ロオマ字で書いた新聞雜誌書籍類が諸方で發行されてゐます。然し何と云つても矢張り議論が一致し難く、ロオマ字派内でも意見が分れてゐるらしい。たゞ新文字制定と云ふものゝ、同時に新しい口語文體の創制、又新標準文體の制作と云ふことになるんだから、諸種族の勢力にも影響があるので議論にも政治的に煩はされる點が生ずるらしい。例へばブリヤト國の標準文語が外蒙國のハルハ語を根底とするが如きは勿論議論の種となります。然しロオマ字化の大體は決定して

擴まりつゝあるのでせう、文獻も漸次増加してゐる様です。たゞそれらの文獻も我々が殆んど見得ないのは遺憾千萬であります。滿洲國の蒙古に就いても我々は是非注意しなければなりません。蒙古文語が現代蒙古語と甚だ隔絶してゐる事は不便極まる上に、新語が急速に増加する運命に在る現在の事情に於ては、舊蒙古字を使用するならするで新綴字法の制定が必要であるし、他の新字にするならするでブリヤト、ハルハ兩國のロオマ字化事情なども参考に資すべきものだと思ふ。たゞ我々はそれ等の資料としてもロシアのロオマ字化の文獻を見て置きたい。私の参考し得るものは、*Vsesoiuznyi Komitet Novogo Turckskogo Alfabita : Kul'tura i Pis'mennost' Vostoka*. と云々雜誌五六冊と *Jazyk i Pis'mennost' Narodov SSSR, stenograficeskij očet 1-go vsesoiuznogo plenuma NS VCK NA. Moskva, 1933* (これは吾友笠井信夫君から拜借してゐます) 其他二三の論文で、實際のロオマ字文籍としては二三のウズベキスタン出版小著を見得るのみとは情けない次第です。

以上はロシアの東洋學の取りとめない話ですが、ロシア以外へ出たロシア人の東洋學もあります。私の氣の付

いてゐる丈を申し上げます。

一、チエコスロヴキヤ。

Obščestvo Sibirjakov v ČSR, Praga があつて *Vol'naja Sibir' , Sibirskij Archiv* なんかの雜誌を出し、又單行本を出してゐる。雜誌の前者などは社會經濟論集と題してゐるが、第一冊などはボタニンの紀念號で我々には縁が多い。

二、波蘭。

波蘭の東洋學はロシア東洋學の支派であります。以前私は「支那學」第四卷第一號に波蘭東洋學年報を紹介した際に多少波蘭東洋學に觸れときましたが、尙ほ *V. Pičeta : Vostokovedenie v Pol'se. (Nouvel Orient, 12, 1926) ; A. Macedonskij : Haučnaja Chronika. (Institut Oriental'nych i Kommerčeskich Nauk, Kružok Vostokovedenija : Na Dal'nem Vostoke. No. 1, Harbin, 1931.)* などに紹介があります。勿論それよりは波蘭の文籍を読めばよく分るんです。蒙古滿洲學の大家コトキチは今は波蘭で研究を發表してゐるのです。

三、芬蘭。

芬蘭の東洋學もロシアの一支派であります。ロシアの

蒙古學者であつたラムステッド博士は今はこの國に屬してゐます。有名な東洋學雜誌フイノウゴル學會誌もこのものであります。

四、哈爾賓。

ハルピンは法律大學があつて報告集を出してゐる。その二三は嘗て紹介した事がありました。又商業學校もあり、その報告集は波蘭の條下でも引用して置きました。兩校共に今は廢校でせうか。又これ等を中心として北滿鐵道の人々と東省文物研究會が組織され、東省雜誌 *Vesnik Mančžurii* を出してゐました。その會もどうなりましたか。この會の雜誌の考古學論文は我國にはよく知られて居ります。其他ハルピン出版物には東洋學に關係あるものが少くない様です。

五、上海。

エミグラント露人が澤山居るのでよく雜誌も出ますが餘り續かぬ様です。出版も相當あります。東洋學關係のものは澤山はない様に思ひます。

六、米國。

紐育の *Roerich Museum* が代表でせう。印度にもある様です。中亞探検や西藏學に對する研究が主と見え

ます。出版を澤山してゐます。Georges de Roerich の藏英字典(出たと聞く)や *Tibetica* の方言研究などは極めて重要な文獻と信じます。内藤先生が歐洲よりの歸途香取丸で印度あたり迄同船だつたのは確しか *Nikolaj Reichen* だつたと覺えてゐます。本研究所の所長であります。

七、新疆。

ウイグル地方で、近頃愈々盛んになつて來たらしいのです。前に一寸述べました。

八、日本。

何か出版や雜誌もある様ですが大した事はない。

其他ベルリン、パリ、ベルグラアドなどにもエミグラントロシアの學問はある様ですが、よく私には分りません。兎に角露領内は東洋諸民族が雜居してゐるからでもあります。東洋學研究は他國よりは流布してゐる觀があります。純學術的に出來上つてゐるのはアカデミイであります。然し地方での研究のものも少なからず我々には必要なものもあるのですから、是非我國の東洋學界も彼等に注意せねばウソだと私は思ひます。

これは今年六月二十四五日の兩日に涉り東方文化學

院京都研究所で講演した原稿を多少補正して書いたものであります。當時展覧に供したロシア文獻は皆何等か講演に關係あるものではありましたが、講演にも又此の文にも出てゐるとは限りません。この文に書き込まうと思つても見ましたが、そうウマク行きませんでした。ロシア字のロオマ字譯は舊アカデミイ式にしたつもりです。附注も面倒ですから精細に出来ませんでした。

附註

- ① B. Lafter: Skizze der mongolischen Literatur, Keleti Szentle, VIII. p. 211., note 2.
- ② 拙稿「故バルトオールド先生」(龍谷大學論叢第二九五號)でも見て下さい。
- ③ 靜安學社通報 第一期六頁。
- ④ 支那學第四卷第一號、一二四頁。
- ⑤ 蒙古年鑑昭和十一年版、一三六頁。
- ⑥ 支那學第四卷第二號、一六〇頁。
- ⑦ S. Malov: Matériaux relatifs aux dialectes ou gours de Sin-Kiang. (オルデンブルグ紀念論文集)
- ⑧ 東洋史研究第四號四十六頁。
- ⑨ ザビスキ第二十卷、ペトロフスキ弔傳。
- ⑩ 拙稿故ヴラヂミルツォフ先生、龍谷史壇第十一號、七一—三頁。
- ⑪ 支那學第四卷第二號、一六〇—一六一頁。

(三十八頁の續き) 實物を見ないから何とも言へぬが、私が所據にしたのは以上の如きものであるから周君に再考を煩はしたい。更に最後に私が「民國學術論文索引」殊にその沿革地理方面のそれを編輯されてはと言申添へた事に對して森は一體『國學論文索引』が既に四編を出だし、その上、『地理論文索引』(筆者按ずるに實名は『中國地學論文索引』)のあるのを知らないのかと揶揄してゐるが、當時未だ『國學論文索引』の四編は出でず、頻々としてその數を増した沿革地理關係の論文は整理されずにあつた。僅かにわが東方文化學院京都研究所に於いて『昭和九年度東洋史研究文獻類目』の出版さるゝあつてその渴を醫しえたのである。そこであのやうな注文を出して、我々よりも便宜の多いこの派の人々にその整理を要望したのである。又たとへ、四編の出た今日でも『國學論文索引』や『中國地學論文索引』の如き體裁内容では尙足れりとは思はぬ。周君とてもその點同様であらう。私の言つた「民國學術論文索引」は少し欲望の多いものである。

(森)